

裳立山に眠るドイツ人の夢

西村 千恵子

滋賀県には誰もが知るように日本で最大の湖、琵琶湖がある。この湖はちょうど滋賀県の中央部を占めているので、湖をはさんで東部と西部に地域が分けられる。東部のほうは平野が広がる豊かな穀倉地帯だが、西部は比叡山や比良山系と呼ばれる、美しい琵琶湖を守る山々に囲まれ、平地が少なく山間に集落が集まっている。ここにはまた、近年その「里山」や「棚田」がメディアで全国的に紹介されている地域がある。

霊峰比叡山は古来聖地として崇められているが、今日では四季折々の自然を求め、延暦寺根本中堂を目指す観光客で賑わい、ずいぶん世俗化した。それでも、観光客の引けた午後、静寂が戻ってくる頃には人の心に感動を起ささずにはおかない凜とした空気が漂う。かつてそのような午後の遅くに、元ジーゲン大学教授で関西大学の招聘研究者として来られた故ヘルムート・クロイツァー (Helmut Kreuzer) 教授ご夫妻も、根本中堂を訪れたとき、甚く感動されたということである。その比叡山のふもとにかつての門前町坂本があり、その名の通り、伝統的に「お寺」で生活が成り立っていた。また、坂本はこの町特有の穴太衆積みという石垣を建造する技術でも知られている。

根本中堂にお参りを目指す多くの人、この町を通らず別のルートを取る。しかし最近健康のために徒歩で登る人も増え、司馬遼太郎の『街道をゆく 十六』のお陰で「門前町」坂本も少しは知られるようになってきた。それでも、全国の日吉神社の総本山日吉大社がここにあるということを知る人は少ないし、500年前の近江八景の中にも、現代滋賀県が選んだ琵琶湖八景にも、坂本の寺や石垣は選ばれていない。ここから見える琵琶湖は十分趣があり、歴史を紐解けばこの町にはまだまだ面白いものがあるのに、世界的都市京都や奈良の陰に隠れてこの町がこれまで余り人々の関心を引かなかつたのは残念なことである。そもそも世界遺産に登録された大津市の比叡山延暦寺根本中堂すら、古都京都の遺産

の一部になっているに過ぎない。

この坂本からは延暦寺へ登るのに、ケーブルという手段がある。これは昭和2年(1927年)に作られたもので、総延長2025mにおよび、比叡山の東側の斜面を登る。琵琶湖への素晴らしい眺望を楽しめるのも魅力である。途中で駅が二つあるが、これは、ケーブルカーには珍しいようだ。この二つの駅「ほうらい丘」と「もたて山」は、そう沢山の人が乗り降りする駅ではないが、途中の小さな神社に参拝したい人や、そこから山頂を目指したい人が使う。この裳立山に碑が二つある。一つは紀貫之の碑であり、もう一つはあるドイツ人夫妻の供養塔である。ほとんど誰にも知られていないが、実はこのドイツ人は日本のドイツ語教育に多大の貢献をした人物である。本稿でこのドイツ人とその供養塔にまつわる話をご紹介したい。

ブルーノ・ペッツォルト (Bruno Petzold)、この名をグーグルでカタカナ検索すると、片岡義道「ブルーノ・ペッツォルト『天台教学の精髓』の現代的意義について—新しい哲学的な神秘思想—」と、土井裕人の論文が出てくる。一体この人は比叡山の延暦寺とどのような関係にあるのだろうか？彼はドイツ語およびドイツ文学の教師として、第一高等学校、中央大学、立正大学、また、成蹊高等学校、で教鞭をとっていた。それは1917年から1943年の間である。

ブルーノ・ペッツォルトとその夫人、ハンカ・ペッツォルトおよびその記念碑を知っている人は、この碑を個人的に世話していた比叡山延暦寺の真島全性師及びそのご子息の康裕師以外に、実は当地坂本には10年ほど前までほとんどいなかった。坂本観光協会が1997年春の観光ツアーに「ドイツ人のお墓」を組み入れた。しかし参加者にはそれがどんな人たちかは分からなかった。あるとき、そのハイキングに参加した坂本のある婦人が、その碑に刻まれる名前が一体誰のだろう、なぜこのような場所にあるのだろうと疑問に思ったのである。さらにもう一人、このドイツ人の墓に興味を持った、坂本の歴史を調べている男性がいた。彼は裳立山にある紀貫之の碑の近くにこのペッツォルトの記念碑があることを聞き、それを一人で探し、8年がかりで見つけたのだそうだ。この碑はそれほど見つけにくいところにひっそりとあったのである。

もっともそれまでこの碑のことが誰にも全く知られていなかったとい

う訳ではない。例えば『日本近代化の先駆者たち』の中で手塚竜磨は1965年に比叡山の裳立山でこの碑を探し回った挙句に、ついに見つけたことを書いている。何枚も写真を撮りながら、そのときの様子を手塚竜磨は次のように書いている。

「供養塔のうしろにまわると、夫人だけの名がきざんであった。

Hanka Petzold

Geb. Schjelderup

1862-1937」

従って、このときにはハンカの名だけが刻まれていたのだ。しかし、1990年代後半になって、坂本の歴史に興味ある人たちが訪ねていったときには、ここに、Bruno Petzoldの名も刻まれているのを見ている。手塚竜磨によると、ここにこの二人が眠っているのを知っていたのは、ブルーノ氏の教え子達ではなく、ハンカ夫人の教え子達の多くである。ハンカ夫人は死ぬ前に比叡山に埋葬して欲しいと望み、それが叶えられ、夫より先に逝った夫人の碑が建てられることになった。

ハンカ夫人は世界的な音楽家であり、東京芸術大学音楽科の前身、上野音楽学校で教鞭を執った。ハンカ・ペッツォルトは日本で音楽を学ぶ学生に初めて《ベルカント》の唱法を教えた教師であり、柳兼子、関鑑子、鈴木のお子、立松房子など日本を代表する独唱家を育てたことでよく知られている。しかし東京で活動していたこの有名な音楽家とその夫の墓がなぜ滋賀県のこの場所にあるのだろうか。

先の手塚竜磨がその後が続けているように、「夫君の関係者が墓参した話はきいたことがない。地味な学者で日本仏教の研究というのではひきつける力がないのかも知れないが、そのかくれた業績に対してこそ特別のはからいがとられたことを記憶しなければ故人に相済まない。一日も早く

Bruno Petzold 1873-1949

と刻みこんでいただきたい。」という言葉から彼女の夫について少し分かることになる。ブルーノ・ペッツォルトが日本では一般にあまり知られていない仏教研究家、しかも天台仏教の研究家であったからこそ、「特別な計らい」がとられたというのである。しかし、実際には歴史を掘り返して、ブルーノ・ペッツォルトと関わりをもつ人々に行き着き、彼の

業績を評価するには時間がかかるだろう。

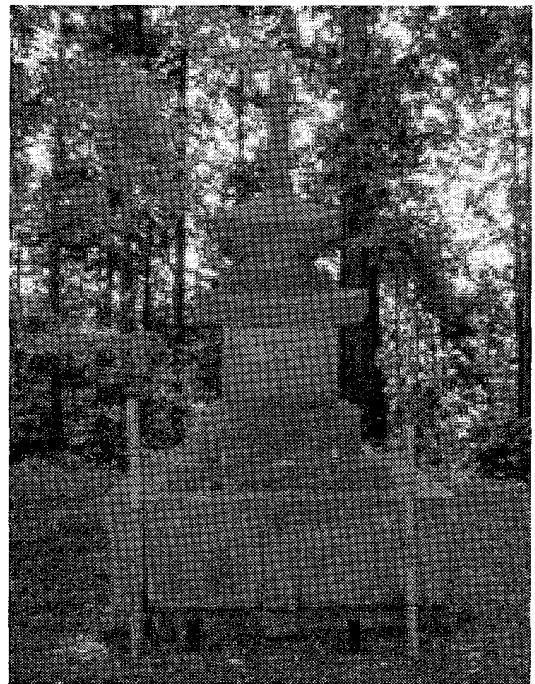
ブルーノ・ペッツォルトは、1873年8月3日に当時のドイツ領シュレージエンのブレスラウ（現ポーランド：ヴロツワフ）に生まれた。ライプツィヒ、及びベルリンで哲学、心理学、国際経済学を学んだ後、ジャーナリストとしてパリ、ロンドン、天津などでドイツの新聞、雑誌のための執筆をしていたが、1910年12月8日に『ケルン紙』の特派員として東京へ来た。彼の息子アーヌルフ・ペッツォルトによれば、おそらく特派員としての仕事をしながら、彼は日本の民族的なものに興味を抱くようになったのだという。特に寺院の祭事に魅せられ、やがて大乘仏教の教義と出会うことになる。先にも書いたように、彼がドイツ語の教師として教鞭を執るのは1917年からであり、この間7年の彼の活動は具体的にはよく分かっていない。ただ、第一次世界大戦の勃発によって、彼は祖国の特派員を辞めなければならなくなった。あるいは別の資料によると、仏教を本格的に研究するために、新聞社の煩わしい仕事を辞めたとある。彼は日本に留まることを選んだのだ。そしてさらにそれから十年足らずの間に島地大等との出会いがあり、その優秀な弟子、花山信勝に天台仏教について個人教授を受けるようになる。これは1926年から1945年まで続いたという。その間、ブルーノは1928年に「得度」、法名「徳勝」を与えられる。さらに天台教学研究論文の出版も高く評価された。1949年2月14日に亡くなるまで、彼はドイツ語や英語で大乘仏教の教義について論文を書き、世界に向けて発信した。戦禍に苦しむ年月にも耐えて日本に滞在しているが、ドイツから遠く離れていた彼のもとへもナチの圧力があつたという。1948年には天台宗から「僧正」の位が授けられ、死後には最高位の次の位である「権大僧正」の位が与えられた。

ブルーノの研究に関しては仏教界には多くの手がかりが残っているが、残念ながら彼は日本語で書かなかつたため、また、日記なども未だ不明なため、ブルーノ個人に関しては上に述べたこと以外によく分からない。これに対してブルーノの妻ハンカについては、資料も多く残され、よく知られている。彼女は1862年にノルウェーのオスロ近郊で、音楽家一家に生まれる。その当時ノルウェーはまだ、スウェーデンの支配下にあつた。彼女は若いうちからヨーロッパの有名な都市で音楽の勉強をし、ヨーロッパで音楽家として成功していた。1909年にハンカは日本

裳立山に眠るドイツ人の夢

で演奏会を開き、その翌年の暮れに上野音楽学校の専任講師に着任する。彼女が教えたのはピアノと声楽であった。彼女の活動は東京だけにとどまらず、日本各地で演奏活動を行い、西洋音楽を日本に普及させるのに大きな役割を果たした。1924年に契約切れで上野音楽学校を退任するが、教え子達とはその後も交流を続け、1937年8月14日に聖路加病院で亡くなるまで、そして死後も弟子たちに慕われ続けた。まさに「音楽は国境を越える」を体現した一生であった。ハンカは死に臨み、かつて訪れ非常に感銘を受けた比叡山に葬られることを遺言としたのである。

この遺言がかなうのは1940年である。供養塔が建立され、11月に開眼法要が営まれたことが記録されている。しかしその9年後に亡くなったブルーノの名は、すぐには刻まれなかった。その大きな理由は、この夫妻の子息アーヌルフが1948年にカナダへ渡ってしまったことだろう。この息子の同意なしには供養塔に手を付けることができなかったのではないと思われる。彼はその30年後の1978年に来日し墓前法要を行い、ようやくその碑に「BRUNO PETZOLD 1873-1949」が刻まれたのである。手塚竜麿が、比叡山でこの供養塔を見つけた15年後のことだ。これら比叡山との関わりについては比叡山の資料『天台座主記』に記録が残されている。



さて次に、このブルーノとハンカについて、どのような人がどのように調査を行ってきたか、さらにそれがどのような影響を及ぼしているかを述べていきたい。

2000年3月、叡山学院から一冊のブルーノの著作が翻訳され、『比較宗教学への試み ゲーテと大乘仏教』という表題で発表されている。原題は „Goethe und der Mahāyāna Buddhismus“で『日本ゲーテ協会年報1936年』所収である。翻訳者は小嶋昭道、喜里山博之とある。この本の経歴によると、小嶋氏は1919年滋賀県生まれ、1940年第一高等学校文科乙類卒業、1942年東京帝国大学文学部印度哲学梵文学科卒業後、東京府青山師範学校教師となる。滋賀に帰郷後、無争学園、県立高等学校に勤務、退職後は大学の非常勤講師として社会科教育法を教えていたとある。一方、喜里山氏は1930年坂本に生まれ、1953年に大谷大学文学部哲学科、西洋哲学卒業、1959年立命館大学大学院経済学研究科修了。経済哲学専攻、四天王寺国際仏教大学教授とある。この翻訳本にはこれ以上の経歴は書かれていないが、実は二人とも、寺院に生まれている。特に喜里山氏の生家は比叡山の里坊、行泉院であり、彼はそこの住職でもあった。

さて話しは先の素朴な疑問が坂本で話題になった頃に戻る。坂本に住むその婦人は実は喜里山氏の家の近くに住んでいた。彼女はハイキングの後、喜里山先生ならば知っているかもしれないと、裳立山の碑について尋ねたのである。ところがちょうどその頃、小嶋氏のもとには義兄に当たる、辻村公一氏から、ブルーノの功績を後世に残すべくまとめては、と言う話しもまたあったのだ。これは少し説明すると、辻村公一氏の先輩である西谷啓治氏（当時京都大学名誉教授）からの依頼であったという。着任間もないブルーノの授業を受けた西谷啓治氏は、ブルーノの功績が日本で正当に評価されていないことを遺憾に思い、是非研究、再評価して欲しいと、辻村氏に切望され、亡くなられていたのである。それを聞いた小嶋氏は、喜里山氏へ何か手がかりを比叡山に求めることができるかどうか連絡した。つまり、喜里山氏のもとへほとんど関連のない方向から、同じ人物に関する情報を訊ねる問い合わせがあったのである。それがブルーノ・ペッツォルトを発掘する大きなきっかけになった。小嶋氏は1998年までペッツォルト夫妻の墓が比叡山にあることを知

らなかつたらしい。50年以上たつてかつての師の碑に出会い、しかもそこに僧階を見つけたときの驚きと感動は、表現する言葉もなかったほどだろうと思う。小嶋氏自身は、旧制一高時代には、ブルーノの仏教研究についてはそれほど詳しくは知らなかったと述べている。それから彼らの奔走が始まった。それはまず素朴な疑問を解くことから始まり、さらに奥深い疑問へと進む道であった。

記録されている事実は、その調べる先が判れば面白いようにわかってくる。先に挙げた『天台座主記』から、供養塔の建立の経緯が明らかになり、ブルーノに僧階が与えられた様子も詳しく伝えられていた。また叡山文庫には、ブルーノ、およびハンカの略歴も残っていた。これらの資料を自らの目で確かめながら読んでいくとき、もうすでに現役引退をしていた一人と、その間際にいる一人はきっと少年の心のように、宝物を見つけた喜びで一杯だったに違いない。かくしてブルーノの業績と研究についての調査も進んだ。ペッツォルト夫妻の碑がたいそう立派なものにもかかわらず、なかなか人の目につかないところにひっそりとあったように、彼の研究も一般には知られないところにあつたのだ。前出の『ゲーテと大乘仏教』の中で解題として、ブルーノの著作が日本語訳と欧文版とに分けて収録されている。その数はブルーノが限りない熱意と努力で、研究を行っていたことを証明するに十分なものである。欧文版には1980年代あるいは1990年代に遺族と関係研究者がまとめて出版したものもある。このことはブルーノの著作が、評価はどのようにされているかは別にして、関心をもたれていることを表しているといえるだろう。

ここまで来ると「なぜブルーノは天台仏教にそもそも興味を持ち、その教義の研究をライフワークとしたのだろうか？」という疑問に至るのは自然の理であろう。この疑問を解明すべく、『ゲーテと大乘仏教』の訳が取り組まれたのである。喜里山氏はこの論文を翻訳することを強く望まれた。彼らがなぜ特にこの論文を取り上げたのか、その理由を小嶋氏の『随想』から引用しよう。

「先生が取り上げられた問題は、既発表論文リストの題目から判断する限りでは、非常に広い範囲にわたっていることがわかる。一方では、日本における仏教研究が新しい視野で捉えなおされるようになった契機

は、サンスクリット語研究導入によることから、サンスクリット研究における萩原教授の仕事の紹介がされている、だが同時に他方では古くからの漢訳仏典に基づく研究の蓄積が日本にはある。ここに分け入った先生の研究成果が、仏教諸派の教理分類（教判）紹介に始まり、最も力点を置かれた天台宗の叙述に至るわけである。それらは、こうした個別の分析、紹介であるが、最も関心と呼ぶのは、東西の思想比較と交流に目を向けた《Goethe und der Mahāyāna Buddhismus》（『ゲーテと大乘仏教』）である。」つまり、ブルーノの中にある大乘仏教とゲーテがどのように繋がりを持つかを、彼の論文を翻訳することによって考察し、それがいわゆる西洋と東洋との交流点を見出していくひとつの契機になるであろう、と考えられたのである。

その後、二人で文献照合などを重ねながら翻訳が進んでいったのである。この二人は、しかしドイツ語を勉強されたのは、一高時代と大学時代だけだと後から聞いた。50年以上前のドイツ語教育のすごさを見せつけられた思いがする。

この翻訳が終わったとき、ブルーノの思想をさらに多くの人に知ってもらおう、そして遺された業績を研究しようという二人の想いはますます強くなった。そして次には、『天台教学の精髓』（Die Quintessenz der T'ien-t'ai-(Tendai-)Lehre）を、先に挙げた、片岡義道と共に、3人で翻訳を試みることになった。この片岡義道という人は、天台真盛宗西教寺派の僧であり、東洋音楽研究、特に「天台声明」の研究家であり、またドイツ語を教授していた。喜里山氏が始めは一方的にかつての師の片岡家を訪ねて共訳のお願いをされたそうだ。こちらのほうは残念ながら未だ完成に至っていない。その大きな理由は、片岡義道氏が2002年に亡くなられたからである。

2000年に『ゲーテと大乘仏教』の翻訳本ができるまでに、坂本で個人的に素朴な疑問を持った婦人はこの二人を通して、その供養塔が建てられた経緯を知ることになった。彼女はその後、供養塔を建立する際に使われた石について調査を試みたそうだ。これはしかし、地元の石材店にはその当時に携わった人がもう亡くなられ、一切の記録が残っていなかった、ということまでしかたどれなかった。また、もう一人の供養塔を探索していた男性も独自に叡山文庫へ通い、ペッツォルトについて調

べていたという。この叡山文庫で小嶋氏との出会いがあった。そして偶然なことに彼の住まいは小嶋氏の近くであったのだ。また、ブルーノの翻訳が発表されたことで、延暦寺からも関心が寄せられるようになってきた。ここに来て、ペッツォルトをめぐる人たちが、お互いの磁石で吸い寄せられるかのように一つのまとまりになっていくのである。

2001年彼らは揃って供養塔に参拝する。この頃から、ハンカ、ブルーノ・ペッツォルトをこのまま再び埋もれさせてはならない、という関係する人々の想いが大きくなってきた。宗教者の立場から、研究者の立場から、ブルーノの子弟達から、あるいは坂本の発展を願う人の立場から。こういった意向をくみ上げて、「記念会」を作ろうということになった。

「ペッツォルト夫妻を記念する会」は2004年11月に立ち上げられた。それまでに、記念会を運営する人々が集められ、各方面に呼びかけが行われた。発起人として、『ゲートと大乘仏教』の翻訳者の二人が並んだ。これによって、ペッツォルト夫妻のことをより多くの人に知ってもらえる活動の拠点ができたのである。このときには、多方面に亘って呼びかけがなされたという。旧帝大でブルーノ・ペッツォルトにドイツ語を習った人たちへも声かけられた。そのときのリストを見せてもらったとき、並んでいる錚々たる方々の名前を見て驚きを通り越し、あきれられるほどだった。立ち上がったばかりの研究会を、早速京都新聞や朝日新聞が取材している。新聞掲載は2004年の末から2005年の初めにかけてされているが、これにより関心を持った人々が坂本へ目をむけることになる。各方面で活躍する、宗教哲学者、歴史学者たちがコンタクトを求め、埋もれた業績の発掘にそれぞれの立場から協力することになった。その中にはブルーノに関心を寄せる人もいれば、ハンカに関心を寄せる人もいた。例えば、ブルーノの所蔵していたものは、今はハーバード大学のイェンチェン（燕京）図書館、オーストラリアのキャンベラ国立図書館、国学院大学に分散されて所蔵されているが、ブルーノに関心を持つ方がハーバードで直接その所蔵の文献を探されている。また、ブルーノがいたライプツィヒ大学に彼の論文があるのもわかってきている。ハンカに大きな関心を寄せた一人に関西大学教授のシャウベッカー（D.Schauwecker）氏がいる。彼も新聞に載った記事を読んで、この会に携わるようになった。彼はハンカについて書かれたアーロン・コーエン

(Aaron Cohen) の英語の論文を参考文献に提示し、どちらかといえば、ブルーノ色の強かったところへ、ハンカ夫人の存在も強調される契機を作った。また話しが少し飛ぶが、2006年の秋、ドイツの放送局ZDFが比叡山延暦寺の僧の回峰行を取材に訪れ、周辺の事情を説明するのにこの供養塔と研究会についても取材していった。日本で仏教研究をしたブルーノと日本に西洋音楽を教えたハンカの紹介がドイツへ向けても行われるというのだ。現在のところ放映に向けて準備中とのことだが、これは会を支える人たちにとって嬉しい出来事であった。

活動が大きな一歩を踏み出したとき、あまりにも突然の大きな不幸が起こった。会の発足を主導的立場で行い、『ゲーテと大乘仏教』を訳された喜里山氏が病に倒れ、2005年の夏、短い闘病の後亡くなられてしまったのだ。このことは会にとってまた小嶋氏にとって、大きな痛手であった。しかし立ち上がった会はすでに歩み始めている。

この会を支える多方面の人々は、何とかペッツォルト夫妻の名を世に知らしめたいと願っている。しかし、知ってもらうためには自らも更にブルーノとハンカについて勉強していかねばならない。そこで学習会も営まれるようになった。その学習会へは実にいろいろな人が参加している。「坂本に関係あるドイツ人ってどんな人だろう?」「何をしていた人?」「どうして、供養塔が建てられたの?」「どこの国の人?」と素朴な質問がある人も、ブルーノの宗教観や哲学、その当時の時代背景などを研究しようとする人も。これまでもある、郷土史研究会の一つじゃないか、と片付けることもできるかもしれない。実際坂本の町には、坂本の歴史を研究するグループがひとつ、二つではない。皆各々のテーマを掲げて、活動している。ただ、この会は今から、ブルーノやハンカの知られていない業績を自分達の手で確かめながら、それぞれができるところで協力し合って発掘して行こうとしている。そうすることによって素晴らしい宝物が得られることを信じて。それが、今まであまり知られなかったブルーノ・ペッツォルトの天台仏教研究を日本において正しく評価することになることを、この会に携わるすべての人々は望むのである。

この記念会が発足したお陰で、その後の学習会など各事業の記録がはっきりと書きとめられるようになり、また、これまでのまとめもなさ

れ、今後に残すことができるようになった。ここからさらに大きな構想として、ペッツォルト夫妻の『追想集』を出版する計画が立てられるに至り、まもなく出版の予定である。これには多くの資料が収められているので、興味のある方には是非お薦めしたい。

これまで自分で調べ、またこの会に少しずつ携わってきたことから、このような報告を書くことができたのであるが、その中から、初歩の勉強から始まり研究を深めていくのは大学の中だけで行われるものではないこと、また特定の人にだけ与えられたものではないことを現実に実感した。

共同研究というと少し狭く言えば実験や資料のデータ作りなど、主に理系の仕事のイメージがあるが、こういった地域活動の中にあって、いわゆる文系の分野でも可能である。特にそれぞれ普段は全く異なる分野で社会的に活躍している人たちが、関心を持つ同じことに熱中して調査研究を行うエネルギーの大きさには目を見張るものがある。そしてその研究が、初めは自らの関心や、その活動だけのために始まったものであっても、それが、やはりいつかは社会に貢献することができると自覚されるほど成果が出てくると、各人にとって大きな喜びになり、さらに活動は発展していけるだろう。これから、退職して新しく人生を始めようとしている人たちが、今までにしようと思ってもできなかったことに手を付けるとき、一つの指針となるかもしれないし、これから高校生、大学生になる若者にとっても、刺激になることを期待したい。

こういった試みをしていくことで、ペッツォルト夫妻が眠る比叡山裳立山を臨む滋賀県の小さな町の坂本の魅力が増し、地方発信の文化に貢献できるようになれば幸いである。

参考文献及び参考資料

- 『ペッツォルト夫妻略年譜』（ペッツォルト夫妻を記念する会 会員） 岡見 亮
『ドイツ人ペツォールド夫妻供養塔』（ペッツォルト夫妻を記念する会 会員） 澤田 嗣郎
『ペツォールド夫妻の供養塔』（ペッツォルト夫妻を記念する会 会員） 手塚 竜磨
『「ペッツォルト夫妻を記念する会」発足までの経緯』岡見亮

西 村 千恵子

「日本文化の宝を究め東西交流に尽くしたドイツ人ペツォルト夫妻の事蹟を学ぼう」

(ペツォルト夫妻を記念する会提唱 小嶋昭道、喜里山 博之)

『比較宗教学への試み「ゲーテと大乘仏教」』小嶋昭道、喜里山 博之 共訳 叡山
文庫 2000年

『「想いはとわに」追悼 喜里山 博之先生』2006年私費出版

LEBENS LAUF VON BRUNO PETZOLD Arnulf H.Petzold aus „Goethe und der
Mahāyāna Buddhismus“ 1982年

Brand in Tsukiji aus „Verklungenes JAPAN“ Felix Kapellmann

『比叡山裳立山だより』No 1 からNo 6

『街道をゆく 16』司馬 遼太郎 朝日新聞社 1981年

『柳兼子伝』松橋桂子 水曜社 1999年

「〈随想〉比叡山裳立山に眠るブルーノ・ペツォルト先生のこと」小嶋昭道

Einige Anmerkungen zur Taetigkeit von Hanka Schjelderup Petzold in Japan
Detlev Schauwecker

写真提供 及び様々な情報提供「ペツォルト夫妻を記念する会」の皆様